

真夏の「ちゅう兵衛」～北克一教授のご退職を祝して～

村上 泰子[†]

北克一先生に初めてお目にかかったのは、当時京都大学にいらした原田勝先生が大学図書館の職員の方々と一緒に催されていた土曜日午後の研究会（「学術情報研究会」という名称だった）に来られたときだった。院生であった筆者の発表に対し、そのヴィジョンを鋭く問い質され、まさにコテンパンだったことを今も鮮明に覚えている。発想の陳腐さや検討の甘さを見逃されず、丁寧ながらも寸鉄の言で相手を刺す舌鋒の鋭さは当時も今も変わっていない。時代は昭和から平成に移って間もなくの頃だった。

その後数年経った頃であったか、日本図書館研究会の研究大会での発表にお誘いいただき、爾来現在に至るまで研究をご一緒させていただいていることを大変有難く思っている。恩師が早くに急逝し、以来ここまで曲がりなりにもこの世界で禄を食んで来られたのは北先生のお陰である。

そんな北先生との数ある思い出の中でもとりわけ印象深いのが、名古屋の愛知学院大学でご一緒させていただいた司書講習である。愛知学院大学は名古屋市郊外の日進市、長久手古戦場付近にあり、毎夏司書講習が開催されている。その目録演習の担当が北先生で、2000年頃から数年間お手伝いさせていただいた。司書のカリキュラムが改訂されて、目録演習においてもコンピュータ目録の実習が必要とされるようになっていた。先生はそのためのツールをいち早く開発されていた。ツールの開発だけにとどまらず、緻密に計算され工夫が施された教材が同時に用意されていたことは、ツールを活用する側にとって大変有難いことであり、利用する者の

ニーズを常に的確にとらえて形にされる先生らしさの表れでもあると思う。和図書、洋図書10問ずつ用意された問題群は、最終問題に向けて基本的な内容が一步步学習できるように配置されていた。愛知学院大学での講習もこのツールを用いて行われた。最初の2年ほどは和図書をコンピュータ目録で、洋図書をカード目録で演習する形で実施されたが、その後は和洋ともにコンピュータ目録を用いるようになった。

真夏の名古屋は、京都に長年住む身にとっても驚愕の暑さであった。地元のタクシーで聞くと、長久手は盆地状になっているためとのこと。肌にまとわり付くような湿り気の多い重量のある暑さに、少しの休憩時間に移動するだけでも汗だくになった。

そんな酷暑の講習では、講習担当者全員で参加する講習後ほぼ毎夜の給水が何よりの楽しみであった。当時よく立ち寄ったのが本郷近くの「ちゅう兵衛」という居酒屋だった。「ちゅう兵衛」での真の楽しみは、実はビールによる給水そのものではなく、そこで展開される様々な会話にあった。各担当者が講習時に疑問に思ったこと、直面した問題などには北先生が明快な解を返される。悩んでいたのが馬鹿らしく思えるほどの目から鱗の解決策を提案されることもしばしば。ここでの議論が発端となって、学会発表に繋がったことも少なくなかった。

しかしこれらの現実的な会話が交わされるのはまだ酔いの回らない段階であり、杯を重ねて乗ってくると、話は図書館界、教育界、社会世相にまで発展した。とくに中部大学の松林正己さんが同席されていると、カントやらハイデggerやらローティといった哲学者の名前が次々に飛び交い、日々の研究活動を裏打ちしている

[†] 関西大学

分厚い知識の層を垣間見ることができたのだった。

哀しいかな、杯を重ねて調子に乗るとそのときに交わした会話の大半を翌朝にはきれいさっぱり忘れ去ってしまう特技を持つ筆者は、そこでの会話の具体的な中身をほとんど覚えていない。が、数年間そうした環境に身を置くことができた経験は、筆者にとって大きな財産となった。

講習のとき、共同研究のとき、北先生から教えていただいたことは数多いが、その中で今も一番心に刻まれているのは、「人には人の望んでいる以上のことをしなさい。自分は人に、自分の望んでいること以下で満足しなさい。」という言葉である。「あなたがしてほしいと思うことを人にしなさい」とは聖書の黄金律であるが、北先生の言葉はそれを超えている。この言葉は、

煙草とお酒以外で（最近は煙草も断たれたようであるが）自分を厳しく律しておられる北先生らしい言葉であると思う。ついつい自分に甘くなってしまう筆者はなかなか実践できずにいるが、そんな自分への戒めとしても、少しでも北先生の境地に近づけるよう大事にしたいと思っている。

この言葉のもとで多くの院生の方たちが巣立たれた。そしてご退職の日を迎えられたことを心から祝福したい。今後ともご健康に留意され、その豊穡な知識で図書館情報学の研究教育に携わる者たち、図書館現場で懸命に励んでいる者たちの行く道を照らしていただきたいと思う。